未来少女ウルル

山田佳江

1、錆

　石田永子がその少年に出会ったのは小さな花壇のある裏庭だった。先週から夏休みに入ったため、校内に生徒の数は少ない。今は使われていない古い焼却炉から細い煙が上がっているのを彼女は見つけた。
「そこで何をしているの？」
　振り返った少年の容姿に石田は息を飲んだ。グラス越しのカフェオレのような褐色の肌、薄いねずみ色の瞳はカラーコンタクトでも入れているのだろうか。彼女を一瞬見据えたその顔は、生徒が教師に向ける表情とは異なるものだった。

「錆びた金属を見ていました」
　少年は焼却炉に目線を戻した。老いた賢者が子供に語るように
「綺麗ですね。自然に腐食した物質がこんなに複雑な質感を持っているなんて知らなかった」
　と彼は言った。
「え？」
　石田には少年が何を言っているのかよく分からなかった。もしかすると映画か小説の台詞なのかも知れない。中学生の口から出た言葉とは思えなかったのだ。

　彼女は何も言えずに少年の横顔を眺めていた。外は摂氏三十度を越える暑さだ。それなのに彼は学校指定の白いカーデガンを着ている。ゆるい癖のある柔らかそうな黒髪、涼しそうな表情をしているけれど、うなじに汗をかいているのが見える。

　体に纏わりつく湿った熱気に耐えながら、石田は少年の首筋につたう雫を見つめていた。不意に頭がくらりとする。何かがおかしい。この違和感は、そうだ、汗は重力に逆らいシャツの襟から耳の後ろに向かっている。
　彼女はメタルフレームの眼鏡を少し上げて目を細める。雫は少年の首筋を愛撫するようにゆっくりと這い上がっている。

「いけない人だ」
　少年がくすぐったそうに微笑んだ。
「先生は今、僕の髪に触れたいと思ったでしょう。それもとても強く」
　汗だと思っていたその透明な物質は、指のように枝分かれし彼の襟足を優しくかき上げる。
「……何、それ何なの？」
　ゆっくりと石田の方に向き直る少年の、整いすぎた顔立ちに圧倒される。
「それから、もっと他のところにも」
　透明な何かは彼の首から唇に向かおうとしている。後ずさりした石田のミュールがヘチマの花

壇に踵を埋める。
「そして、僕に触れられたいとも思った」
　青すぎる空を背にした少年は、逆光のせいで影絵のように見えた。両手を入れたままのズボンのポケットから、ゲル状の物体が這い出してくる。
「いやっ……」
　キラキラと太陽光を透かしながら、それは石田の身体へ向けて触手を伸ばした。

2、バクテリア

　かろうじて通り抜ける風も熱風に感じるほどの理科室。廊下から窓を覗くと二島悠太が熱心に何かを組み立てているのが見えた。
「おはよう」
　小倉未羽が声をかけると、彼はうつろな目で未羽の方を見て
「今何時だよ」
　とうめくように言った。
「十一時五十分。まだおはようでいいよね」
　悠太は汗止めのため額に巻いていたタオルを外し、ぼんやりとした表情で未羽の足に目を落とす。真っ白なスコートから細い足が伸びている。手には軟式テニスの赤いラケット。
　悠太の視線が未羽の顔を捉える前に彼女はくるりと後ろを向いた。肩のあたりで髪がさらさらと揺れる。
「ぴかっち元気かなー」
　実験机のシャーレに声をかけながら、彼女は蛇口をひねりビーカーに水を注いだ。

「この日差しの中テニスコートにいるなんて正気の沙汰じゃないよね。理科室の方が少しはましかも。ところで何を作っているの？」
　食卓塩の青い蓋を回しながら未羽が悠太に尋ねる。悠太の手元にはモーター、乾電池、導線、それにハムスターの回し車などが置かれている。彼はそれらをタオルで覆いながら
「絶対に教えない」
　と無愛想に答えた。

　未羽が「ハムスターのダイエット器具？」と言いながら嫌がる悠太のタオルを無理矢理取り上げたところで、理科室に本城寛史が入ってきた。
「二島ぁ、タイムマシンの進捗はどうだ？」
「本城先生！」
　悠太の悲壮な表情に気付いたのか、本城はちょっと申し訳なさそうな顔をして話をそらす。
「ああ、小倉いたのか。ちょうどよかった聞きたいことがあったんだ」

「悠太、タイムマシンを作ってるの？」
　興味深そうに目を輝かせる未羽に本城は、
「夏休みの自由研究にタイムマシンの作り方を相談されるなんて教師生活五年で始めてだけど、お前の自由研究もなんだかとんでもない事になってるぞ」
　と実験机に置かれていたピンク色のノートを手に取った。

　その花柄のノートには『発光バクテリアを培養してみたよ☆　二年二組　小倉未羽』と表紙に

書かれている。
　本城の持つノートを悠太が覗き込みながら読み上げる。
「お父さんがイカを釣ってきたよ、お母さんがおいしい料理をたくさん作ってくれたよ……」
　ノートには色とりどりのマーカーで文章が書かれ、大きなイカを手にして微笑む父親の写真や、イカのリングフライを揚げる母親の写真が貼られている。
「そこはまだいいんだ」
　本城がページをめくる。次の項では調理で残ったイカの皮から発光バクテリアを培養する方法が説明されている。
「寒天培地でバクテリアを培養する。暗いところでの発光を確認する。中学生の自由研究にしてはとても良くできている」
　誇らしげに微笑む未羽に、本城は厳しい目線を向けながら
「小倉は聡明で素直だし、とても嘘をつくとは思えないけれど」
　と言いながらノートのページを進めた。

　次の項では発光バクテリアによる発電の実験が行われていた。
「豆電球が何個つくかな、ケータイを充電してみたよ」
　食塩水の濃度と量、発電のワット数が詳細に記録された書きかけのグラフを三人で眺める。
「こんなことできるの？」
　不思議そうに尋ねる悠太に
「できるよー、見てて」
　未羽は少し口を尖らせて言った。

　未羽が悠太の自由研究を持ち上げる。慣れた手付きでモーターの接続をつなぎ直し、乾電池から導線を外してシャーレの寒天培地に乗せる。
　ビーカーに入った食塩水に人差し指を浸し、ちょっと味見をしてから食卓塩を足す。
「ごはんですよー」
　彼女が楽しそうに食塩水を注ぐとシャーレは蛍色に発光し、ハムスターの回し車は扇風機のような速度でグルグルと回転し始めた。

　本城は夢でも見ているような表情で二人の夏休みの自由研究を見ていた。
「発電しているのか？　バクテリアが食塩水を分解して発電？」
　呆然とする本城をよそに、悠太は無邪気に「すげー」とかなんとか言っている。未羽は長い髪を片手で耳にかけながら愛おしそうにシャーレの輝きを覗き込んでいる。
「お前の自由研究、なんだかとんでもない事になってるぞ……」
　本城はひとりごとのようにつぶやいた。

3、保健室

　ビーカーに入っている液体が本当にただの食塩水なのか、本城が味見をしていると「あれ？」と未羽が小さな声をあげた。
「本城先生、焼却炉から煙が出てるよ」
「本当だ、今は使われていないはずなのに」
　本城がビーカーを実験机に置き、理科室の窓から顔を出す。外ではじりじりと焼け付くような太陽が裏庭に濃い陰影を作っている。
「石田先生が倒れてる！」
　三階の窓から落ちそうなほど上半身を伸ばしていた悠太が声を上げる。校舎の壁際に作られた細長い花壇の上に、石田が横向きに倒れているのを三人は見つけた。

「ちょっと行ってくる」
　本城が慌てて窓から離れ、未羽と悠太も後を追いかける。理科室から廊下に出た未羽が急に足を止める。
「何してんだ、行くぞ」
　後ろにつかえた悠太が声をかけると
「今、廊下にテニス部の子がいたんだけと隠れちゃった。知らない男子と一緒だった」
　教室を出て左側の曲がり角を覗き込もうとする未羽をよそに、悠太は右に走って行った。
「待って、私も行く」
　未羽は慌てて本城と悠太の後を追い裏庭に向かった。

　未羽が二人に追いつくと、本城が石田の前で立ち尽くしていた。
「本城先生、何してるんですか？」
「いや、触ってもいいものかと思って」
　石田はヘチマの蔓をなぎ倒し花壇に倒れ込んでいる。開襟シャツの胸元からキャミソールのレースが少し見え、チャコールグレーのスカートは捲くれて太ももをあわらにしている。
「何を馬鹿なこと言ってるんですか、触らないと保健室に連れていけないでしょう！」
　呆れたように未羽が言う。
「そうだ、保健室に連れて行かないと」
　本城は今気付いたかのように石田に駆け寄り彼女の身体を抱き上げる。「見た目より重いなあ、石田先生」などと言いながら、三人は校舎へ入って行った。

　夏休みのためか保健室には誰もいなかった。ベッドに寝かせ、脱脂綿に浸したスポーツドリンクを唇に当てると彼女は目を覚ました。
「いやぁ！」
　石田は自分の脚を濡れタオルで拭いていた未羽の手を払いのけ、慌てて上半身を起こし掛け布

団を手繰り寄せる。
「大丈夫ですか。とりあえずこれを飲んで下さい」
　本城がスポーツドリンクを手渡す。石田は本城の顔を確認して少し安心したようにペットボトルを受け取り、一息に半分ほど飲んだ。

「あの男子は……」
　布団を口元まで引っ張り上げながら石田がつぶやく。頬は桜色に上気し、額にうっすらを汗をかいている。
「男子？　生徒と何かあったんですか？」
　本城が石田に尋ねる。
「石田先生、裏庭で倒れていたんですよ。熱中症だと思ったけど」
　落ちたタオルを拾いながら未羽が言うと、石田は
「熱中症……、そうよね。夢でも見ていたのかな」
　とつぶやき、自分を見ている本城に気付いて更に顔を赤らめた。

4、ハルカ

　石田が一人にして欲しいと言うので三人は保健室をあとにした。
「もう十二時半か、腹減ったなあ」
　理科室に戻った悠太が黒板の上にある壁掛け時計を眺める。
「あれー？　私のゼリーが無い」
　冷蔵庫を覗き込んでいた未羽は、顔を上げて疑わしそうに悠太の顔を睨む。
「知らないよ、本城先生に没収されたんじゃない。実験用の冷蔵庫に変なもの入れるなって」
「そうかもー、謝って返して貰ってこよう」
　しょんぼりした表情で未羽がつぶやく。
「俺も行こ。ついでに職員室で昼飯食べさせてもらおう。あそこならエアコンも効いてるし」
　悠太が学生鞄から弁当箱を取り出していると、
「あっ、教室にお弁当置きっぱなしだ。ちょっと取ってくるから先に職員室に行ってて」
　と言いながら未羽は理科室から走って出て行った。

　三階にある理科室のちょうど真上に未羽と悠太の教室がある。未羽が階段を駆け上り教室の近くまで行くと、ゆっくりと扉が開いて部屋から男子生徒が出てきた。
　未羽が見覚えのない少年だった。少なくとも二年二組の生徒では無い。どこか南国を思わせる褐色の肌、黒い学生ズボンに学校指定の白いカーデガンを着ている。

　扉を閉めていた彼は未羽がいることに気付いて、何かを思索するようにその顔を見つめる。未羽が圧倒されて立ち尽くしていると、
「ミウ・コクラだ！」
　と思い出したように少年は声をあげた。
「はい？」
「そうか、二〇〇八年！　ミウ・コクラがあのバクテリアを発見した年だ」
　少年はまるでアイドルにでも出会ったかのように嬉しそうな表情をし、一人で興奮している。
「私のこと知っているの？　てゆうか誰？」
　状況が理解できずに困惑する未羽に少年は
「知ってるも何も一学期に歴史で習ったばかりだよ。僕はハルカ・クロサキ。会えて光栄です、ドクターミウ」
　と右手を差し出して握手を求めた。

　勢いに押されて握手を受け入れつつも、未羽はハルカと名乗る少年に説明を求めた。
「僕は約百年後の未来から来たんだ」
　ハルカが臆面も無く言う。
「タイムマシンに乗って？」

　苦笑する未羽にハルカは「うん」と楽しそうに返事をした。
「男子たちの間でタイムマシンが流行しているのかなあ」
　そんなことをつぶやきながらも、未羽は少しだけ彼の言うことを信じ始めていた。なんだかハルカの存在には現実感が無いのだ。同じ時代を生きている人間とは思えなかった。
「見る？　タイムマシン」
「教室の中にあるの？」
　未羽の胸が高鳴る。ハルカが教室の扉に手をかけ、少しだけ未羽の方に振り返り微笑む。なんて綺麗な顔をしているのだろう。うちの生徒だったら覚えていないわけないよね、と未羽が思っていると
「ほら」
　ハルカが教室の扉を開けた。

「これは……」
　未羽が絶句する。黒板の前にある教壇に置かれたそのマシンは、未羽の想像を遥かに超えたものだった。

5、タイムマシン

　そのタイムマシンはちょうど二畳分くらいの大きさで、教壇の上に置かれていた。
「これは、誰がどう見てもタイムマシンね」
　言葉とは裏腹に未羽は失笑していた。ハルカの言うことを信じかけた自分を恥じていたのだ。
　マシンは体操マットほどの厚みを持つ水色の板で出来ていた。一見、艶のあるプラスチックで作られているように見える。左右に一つずつ細めのサンドバックのような棒状の何かが置かれ、操縦席と思われる位置に初期のモニター体型パソコンのようなものがある。操縦席の右側から高さ一五〇センチほどの銀色をした棒が伸び、先端に街灯に似たライトが着いている。

「僕も初めてこれを見た時は、君と同じようなリアクションをしたよ」
　ハルカが未羽の横顔を見ながら苦笑する。
「これってどう見ても……」
「そう、ドラえもんのタイムマシンだ」

　未羽は振り返ってハルカの顔を見る。悠太が新しい自転車を見せに来た時のような誇らしげな顔だった。
「でも良く作られてる。どこで手に入れたの？」
「Yahooオークション」
　未羽がどこから突っ込みを入れるべきか分からず複雑な表情をしていると
「多分、日本で一番ポピュラーな形状にデザインしたんじゃないかな。タイムマシンと言えばドラえもん、みたいな」
　とハルカが言った。
「百年後の日本人でもドラえもんを知っているんだ」
「二十世紀から二十一世紀に放映されたアニメはいつでもネット配信で見られるし、かなり人気があるよ。それに今年はドラえもん誕生の年を記念して新シリーズを始めるらしくて、予告編が何度も放映されてる」
　彼は説明したあと、
「今年と言っても西暦二一一二年のことだけど」
　と付け足した。

「良かったら乗ってみる？」
「わあ、嬉しい」
　ハルカの言葉に未羽がわざとらしく返事をする。もう少しだけ彼に付き合ってみようと思ったのだ。
　ハルカが操縦席にあぐらをかいて座る。靴は脱がなくてもいいのかな、と思いながら未羽がその後ろに膝をついて中腰に座る。

「どこに行こうかな。とりあえず僕が出発した直後にでも」
　彼が操縦席に触れると意外にもタッチパネルらしく、モニタが鮮やかな色味で起動した。画面に映されたデジタル時計のアニメーションが緩やかな動きで秒を進めている。
　ハルカが『2008．7．23　12：39：30』と書かれているタッチパネルの『2008』の部分をくるくると指で弾くようになぞり、西暦二一一二年にセットする。

　彼が『OK』と書かれたボタンをタッチすると、右側の街灯のようなライトが点いた。
「落ちないようにしっかりつかまってて」
　ライトから青色LEDに似た輝度の高い光が放射状に伸び、二人を包んだ。その光は立体映像のようにタイムマシン全体を取り囲み、半透明に輝く檻のような像を結ぶ。
「うそっ！」
　未羽が慌ててマシンからはみ出していたテニスシューズを引っ込める。銀色に輝く大きな円柱状の檻はゆっくりと回転を始める。それはまるでハムスターの回し車のようにも見えた。
「いくよ」
　二人を囲う回し車は次第に回転を早め、液状に溶けるかのように外の景色を隠した。ハルカの肩につかまった未羽の身体に抵抗がかかる。エレベーターに乗った時のような緩い浮遊感。
　信じられない状況に未羽は思わず目を閉じた。

6、スキン

　潮の匂いと波の音がした。彼女が目を開けるとそこは木でできた簡素な部屋のようだった。
「ここは僕の部屋、二十二世紀だよ」
　ハルカがタイムマシンから立ち上がる。未羽もそっと床に足を下ろす。床も壁もむき出しの木肌で作られたログハウスのように見える。
　十畳より少し広いくらいだろうか。籐で編まれたと思われる椅子が二脚、椅子と同じ材質の小さな丸テーブル、部屋の端にセミダブルのベッドが置かれ、反対側の端には木製のキャビネットが置かれている。キャビネットの上には幅一メートルほどの額縁が飾られ、中の絵画はゆっくりと動いている。

　タイムマシンを部屋の隅に寄せるハルカを見ながら、未羽はベッドに腰掛けてみる。粗く織られた麻に似た、ひんやりとした質感のベッドカバー。
「外に出てみる？」
　ハルカに聞かれて立ち上がると、未羽が座っていた跡にできたベッドカバーの皺が自己修復するかのように元に戻った。
　開け放たれた窓に目をやると外には水平線が見える。窓から入ってくる風が心地良い。気温は未羽の学校よりも幾分低いように感じられた。
「うん、出てみたい」
　未羽は少しぼんやりしていた。まだ、自分の身に起こっている出来事を信じきれずにいるのだ。

「じゃあ、繊維の服は目立ちすぎるね。僕の『スキン』を貸してあげる」
　未羽の返事に、ハルカはキャビネットの引き出しを開ける。中から取り出したのはテニスボールほどの大きさの透明な物質だった。
「ここに手を乗せて」
　ハルカが右手に乗せた『スキン』を未羽に差し出す。未羽が恐る恐る、その球体の上に手を乗せる。ゼリーのようなプルプルとした感触が彼女の手のひらに伝わる。
　ハルカが目を閉じるとスキンは液状に溶け出し、未羽の右手をゆっくりと這い上がってきた。
「えっ、やだ！」
　驚いた未羽が声を上げると同時に液体はハルカの手の中に帰って行った。
「拒否しないで、拒まれると着せてあげることができないから」
　彼は目を開けてちょっとだけ未羽を睨み、また目を閉じる。

　未羽の腕をスキンが覆い尽くす。それは彼女の右袖から服の中へと入ってくる。
「……んっ」
　くすぐられるような感覚に必死で耐える。透明なゲル状の物体は未羽の下着の中にまで入り込

み身体を包んでいく。それは首から上へも這い上がり、唇や歯、鼻腔までもをコーティングしていく。
　目薬を点したような感覚に思わず目を閉じる。スキンが目蓋の中に入ったのだ。未羽の毛髪の先端までを透明な物質で覆いつくすと、その作業は終了した。

　彼女が数回瞬きをすると眼球に感じた違和感は全く無くなった。自分の右腕を見てみる。化粧水を塗った直後のように薄く輝いてはいるものの、何かを着ているようには見えなかった。
「下はちゃんと服になっているから安心して」
　未羽が顔を上げるとハルカはもう制服をほとんど脱いでいた。上半身は裸で薄手のハーフパンツを履いている。化繊のカーゴパンツのように見えたが、よく見ると不透明なゲル状の物質でできている。

「これ、服っていうか……」
　ベッドの傍でTシャツを脱ぎかけた未羽が呟く。
「うん、水着だけど」
　制服をキャビネットに入れながらハルカが返事をする。
　テニスウエアを脱いだ未羽が着ていたのは、赤い生地に白い水玉模様のビキニだった。胸元に小さな白いリボンまでついている。

「本当にこの格好で大丈夫なの？」
　不安になった未羽がハルカに尋ねる。
「わあ、すごくいいね」
　未羽の声に振り返ったハルカは嬉しそうに返事をし、
「じゃあ行こうか」
　と部屋のドアノブに手をかけた。

7、コテージ

　ドアを開けると目の前は海だった。どこまでも続く遠浅の青い海。玄関からは長い桟橋が海岸へ向かって伸びている。白い砂浜の向こうは森になっているようだった。
　海岸からはいくつもの桟橋が伸び、小さくて簡素な木の家がそれぞれの先端にある。旅行会社のパンフレットで見た、南の島の水上コテージみたいだと未羽は思った。

「僕の家族はあそこに住んでいるんだけど」
ハルカが海岸の左端を指差す。岩場から切り立った崖の上に何件か住居が見える。遠くてよく見えないけれど、赤茶色いレンガ屋根の平屋のようだった。
「僕の部屋はここなんだ」
　浜辺や海の中では同世代と思われる子供達が数人遊んでいる。水上の家から出てくる子もいる。空には雲ひとつ無い。

「泳ごう」
　ハルカが桟橋から飛び降りる。干潮の時刻らしく、水位はハルカの腰までしかなかった。
　未羽が桟橋に腰掛けて脚を下ろす。爪先に心地よい水の冷たさを感じる。思い切って海に入ると快適な水温だった。足元を小さな魚が数匹、すり抜けるように泳いでいく。太陽の光を反射して水面はキラキラと輝いている。

　海に潜ってしまったハルカを見ながら、未羽は今までの出来事を頭の中で整理していた。ほんの数十分前まで自分は学校にいた。教室でハルカに出会い、タイムマシンに乗って約百年後の未来にやってきた。そして今、バリかモルディブのリゾート地みたいなビーチにいる。水玉模様のビキニを着て。
　水着のブラを指先でつついてみる。シリコンブラのようなプルプルとした質感。水着を着ていない部分は一見皮膚のように見えるけれど、薄くて透明な膜が張られているようだった。だけど、海水の冷たさや風のあたる感覚はある。
　考えれば考えるほど、この状況に現実感が無い。

「泳がないの？」
　ハルカが少し遠くから顔を出し、また潜ってしまう。未羽は不安になり彼を追って海に潜る。水の中で目を開けるとまるで水中眼鏡をかけているように海底がクリアに見えた。
　砂と岩場が交互にある水底には、大きなイソギンチャクやヒトデ、数種類の魚の姿が見られた。泳いでいる未羽のお腹の下を何かが通り抜けていく。驚いて振り返ると小さなエイだった。

　泳いでいるうちに海岸に近づいて浅くなってきたので二人は立ち上がった。
「ここは日本？」

未羽が髪をかきあげながらハルカに尋ねる。
「うん、東京湾のはしっこあたり」
未羽が言葉を失っていると、海岸で遊んでいた少女が駆け寄ってきた。
「ハルカー」
彼女は嬉しそうに手を振りながら近づいてくる。未羽やハルカと同年代のようだった。
「サラ」
ハルカも笑顔で片手を上げて挨拶をする。

「その子誰？」
サラと呼ばれた少女はにっこりと微笑みながら未羽の方を見る。玉虫色のウエットスーツのような水着を着ている。
「新しい彼女」
ハルカの即答に、未羽は目を見開いて彼の横顔を見る。
「またー、何人作ったら気がすむのよ」
サラは笑いながらハルカの肩を叩き、
「その水着、レトロでかわいいね」
と傍で突っ立っている未羽に声をかけた。

「サラの水着もあんな風にしてあげようか？」
「うん、おねがい」
ハルカがサラの身体の上から下まで目線を這わせる。指一本触れもせずに彼女の水着はウエットスーツからゼブラ柄のビキニに形を変えた。
「ありがとう！　みんなに自慢してくるね」
サラは本当に嬉しそうに自分の身体を眺め、また海岸の方へと走っていってしまった。

二人のやりとりを呆然と見ていた未羽に、ハルカは説明する。
「スキンは人の意思で色や形や硬度を変えるんだ。着ている人以外の意思にも反応するけど、それを拒むこともできるよ。例えば僕がミウの水着を透明にすることもできるし、ミウはそれを拒絶することもできる」
未羽は思わず胸元を両手で覆い隠し、ハルカの顔を睨む。そんな未羽をからかうような表情で眺めながら
「発明した本人にスキンの説明をするなんて不思議な気分だ」
と彼は言った。

8、クラブハウスサンドイッチ

　ハルカの言葉に未羽は驚いて声をあげる。
「スキンを発明した本人？　私が？」
　ハルカが海面から出た岩場に腰をかける。ごつごつした岩に水溜りがいくつかあり、そこから出てくる小さなヤドカリを見つけて指でつまみあげる。
「二十一世紀に人類にとって大きな変革が起こった。ひとつは海水からエネルギーを得る方法を確立したこと、もうひとつはヒトの細胞から全く新しい人工皮膚を作り出したこと」
　捕まえたヤドカリの殻を覗き込みながらハルカが語る。
「そのふたつの偉大な発明はたった一人の女性化学者によって生まれた。って教科書の丸暗記だけど」
　ヤドカリを水溜りにそっと帰してあげながら彼はそう言った。

「お腹すいたなあ、何か食べない？」
ハルカが急に話を変える。言われてみれば未羽もまだ昼食をとっていなかった。
「うん……」
　未羽がハルカの隣に腰掛ける。彼は左手の中指にはめられた細い指輪に触れる。黒いリングの中央に埋め込まれたリンゴ型の白い石から立体映像が立ち上がる。
　手のひらサイズのパネル型映像をハルカが指でタップする。指輪は携帯電話の一種のようだった。

「クラブハウスサンドイッチとフルーツミックスジュースをふたつずつ」
　注文画面にハルカが話しかける。『ハルカ・クロサキ様　クレジットお支払い』と文字が表示され、映像は指輪の中に吸い込まれるように消えた。
「部屋に戻ろう。話の続きをしてあげる」

　桟橋を歩いてハルカの部屋に戻ると、ちょうど小さなプロペラのついた木箱が窓から入ってくるところだった。箱の横には『Home-deliveredSandwich』とロゴマークが書いてある。
　ハルカは部屋を飛び回る木箱を捕まえてキャビネットの上に置き、壁に飾られている風景画に手をかざす。絵画はチャンネルを切り替えるようにマルチ画面に変わった。
　彼が木箱から昼食を取り出してテーブルに配膳する。額縁からは複数の映像と音が流れてくる。『メール受信　ママ』と書かれた画面ではハルカの母親と思われる女性が「今週末はこっちに泊まるの？」と喋っている。『ドラえもん22　9月3日配信スタート！』や『このオークションは終了しました　Yahoo！ オークション』などの映像を未羽は興味深そうに眺めていた。

　白い皿に盛られたクラブハウスサンドイッチを二人で食べた。野菜、チキン、ベーコンなどが挟んであるボリュームのあるサンドイッチも、大きなグラスに入ったミックスジュースも、未羽

にはとても美味しく感じられた。どの素材も鮮度が良く、トマトはイチゴのように甘いしレタスは溢れるほどの青臭い水分を蓄えていた。

「ミウ・コクラ……、あった」
　分厚く切られたキュウリのピクルスを齧りながらハルカが額縁の方へと手をかざす。検索結果に出てきたのは中学校の制服を着た未羽の写真だった。彼がクリックするように指先を動かすとナレーションが流れた。
「ミウ・コクラ。二〇〇八年、塩化ナトリウム水溶液を分解して発電する海洋バクテリア『pikachi』を発見。二〇一三年、ヒトDNAのメチル化により人工皮膚『skin』の基礎となる細胞培養に成功」

「ドクターミウの発見は世界中の化学者や企業に応用されたんだって」
　画面に表示される文字を見ながらハルカが説明を続ける。
「海水発電のおかげで二十一世紀には世界中から戦争が無くなり、地球温暖化も緩やかになった。スキンの技術は様々な分野に応用されて、人間はどんな過酷な環境でも身一つで生活できるようになったし、住宅や工業製品も改良されたスキンでコーティングされ、農業は完全無農薬を実現」
　未羽はミックスジュースを飲みながら、まるで他人事のように話を聞いていた。
「感染症による病気はほとんど無くなり、途上国の人口増加も抑制。人類はかつてない円熟期を迎え始めている」

　ハルカが画面をミュージックチャンネルに変える。額縁の中はゆっくりと回転する地球の映像になり、ルイ・アームストロングのWhat a Wonderful Worldが流れ出す。右上に『20thヒットチャート』とアイコンが表示されている。
　確かにハルカやサラの屈託の無い笑顔は人類の円熟期を連想させた。何不自由なく育った子供達、豊かな自然環境、多くの物を必要としないシンプルで簡素な生活。

「感染症はわかるけど、どうして人口増加も抑制できるの？」
　未羽がストローから口を離して尋ねる。
「それは……」
　ハルカがちょっと複雑な笑みを浮かべる。遠くから子供達の楽しそうに泳ぐ声が聞こえる。
「例えば」
　テーブルに置かれた未羽の手の甲にハルカが自分の手を乗せる。小さなテーブルを挟んで座ったまま、彼は未羽の唇にキスをした。
　突然のことに固まる未羽にハルカは
「例えば今、僕とミウはキスしたけれど本当は触れ合ってすらいないってこと」
　と少し照れたような笑顔で言った。

9、どこか

　未羽は頬を膨らませて怒ったように
「二十二世紀の男の子はみんなハルカみたいに手が早いのかな」
　と彼の顔を睨んだ。
「さあ、どうだろう」
　ハルカが自分の唇を指で触れながら含み笑いをする。

「そういえば」
　未羽がふと、部屋の隅に置かれたタイムマシンに目を向ける。
「この時代ではタイムマシンって誰でも手に入れられるものなの？」
「タイムマシンを持っているなんて言ったらみんなに笑われるよ」
ハルカが椅子から立ち上がり、ベッドの上に座りなおす。
「さっきも言ったようにオークションで買ったんだ。まさか本物とは思っていなかったけど」
　ベッドに寝転びながらハルカが額縁に手をかざす。ミュージックチャンネルは小さくなり、ネットオークションの画面が表示される。
「いや、やっぱりどこかで信じていたのかな」
　ハルカがひとりごとのようにつぶやく。額縁の中には『タイムマシン　出品者：space world　このオークションは終了しました』と書かれている。

「小さい頃、どこかの街に連れて行かれたことがあるんだ」
　仰向けになって天井を眺めながらハルカが言う。未羽は椅子に座ったまま彼の横顔を見ていた。
「人がたくさんいて賑やかで、そんな街の一軒の家に筆で絵を描いている人がいた。絵筆や墨なんて初めて見たから面白くてずっと傍で眺めてたな。僕は知らない大人と一緒だった」
　彼は上半身を起こしてタイムマシンに目を向ける。
「後になって気付いたんだけど、どうも江戸時代だったような気がする」
「誰かに江戸時代に連れて行かれたってこと？」
　未羽が尋ねると
「うん、ただの夢だったのかも知れないけれど」
　とハルカは答えた。

「もしかしたら僕らよりもっと未来の人間が、わざわざ僕を選んで、そして……」
　ハルカはそこまで話すと、急に思い出したように
「そうだ、やらなきゃいけないことがあったんだ」
　と跳ねるように立ち上がった。

　ハルカがキャビネットの引き出しから学生服を取り出して、水着の上からそのまま着替え始める。
「ミウを二〇〇八年に送ってあげる。とりあえず一度帰ろう」
「う、うん」
　プロペラのついた箱の中に食器を片付けるハルカを見ながら、未羽も慌てて自分のテニスウエアを手にする。彼が木箱を窓から放す頃には未羽も着替えを終えていた。

　二人はタイムマシンの上に座り、ハルカがモニタの時計を『2008．7．23　12：41：00』にセットする。照明から檻状の立体映像が映し出されマシンを包む。銀色の帯は回転を早め、向こうに見えるハルカの部屋を溶かしていく。
　未羽が軽い眩暈を感じると同時に、タイムマシンは再び時空を移動した。

10、水道水

　ハルカと未羽を乗せたタイムマシンは二年二組の教室に戻ってきた。黒板の上に掛けられた時計は十二時四十一分を指している。ちょうど二人が二十二世紀に出発した直後の時間。窓もドアも閉められた教室にはかなり熱気がこもっている。

「僕はこの時代にちょっと用があるからここで。また会いに来てもいい？」
　マシンから降りる未羽を見上げながら、ハルカが寂しそうに言う。
「うん」
　見慣れた教室を見渡していた未羽は目線をハルカに戻す。急に悠太を待たせていたことを思い出す。それはまるで遠い昔の出来事のような気がした。
「それじゃあ、またね」
　明日会うクラスメートと別れるように、軽い気持ちで手を振って教室を出て行く未羽を、タイムマシンの上に立ったハルカはただ黙って見つめていた。

　未羽が階段を一気に駆け下りて一階に着くと、職員室の前に悠太が立っていた。
「本城先生いないんだよ。あれ？　弁当は？」
　悠太の言葉に、未羽は教室に弁当箱を取りに行っていたことを思い出す。
「えーっと、もう食べちゃった」
「はあ？」
　すっかり満腹になってしまったお腹を撫でる未羽に、悠太は眉をひそめた。

　しばらく職員室の前で待っていると本城が向こうから歩いてきた。片手に未羽のノートを持っている。彼は職員室の前にいる二人に気付いて急に慌てたような表情になり、
「来てたのか。えっと……、さっきは悪かったな」
　と二人から目線をそらした。
「はあ」
　悠太が何のことやら分からず適当に返事をする。
「でもまあ、二人ともまだ中学生なんだから、節度ある交際をだなあ……」
「何の話ですか？」
　言葉を選ぶように話す本城に、未羽が顔をしかめる。
「いや、なんでもない」
　本城はそれ以上何かを言うのを諦めてしまったようだった。

　＊＊＊

　未羽が職員室前にいたのと同時刻。ハルカは三階の理科室にいた。カーデガンのポケットから

折りたたまれた紙を取り出す。艶やかな白い紙に書かれた文章をゆっくりと黙読し、実験机の上に目を向ける。そこには悠太の自由研究と未羽のバクテリアの入ったシャーレが置かれていた。

　ジリジリと蝉の鳴き声が聞こえる。ハルカがふと廊下側に振り返る。開け放たれた窓の外に誰もいない事を確認して、彼は実験机の前に戻る。

　何のためらいも感じずに、彼は透明な物体の入ったシャーレを持ち上げた。それを流し台の前に持って行き、ガラスの蓋を開けると中身を自分の手のひらの上に取り出す。
　ぐしゃり。
　寒天培地はハルカの右手の中で粉々になり排水口へと落ちていく。左手で水道の蛇口をひねると、ぬるい水道水が勢い良く水しぶきを上げる。
　彼は水道水でシャーレを念入りに洗浄し、自分の両手も丁寧に洗う。

　水を切ったシャーレを実験用具の棚に収めたハルカは、静かに笑みを浮かべ理科室を後にした。

11、再び

　急に降り出した大雨のせいでテニス部の練習は中止になり、未羽は理科室にやってきた。
「悠太いないのかな」
　スポーツタオルで髪を拭きながら部屋を見渡す。実験机の上には多少改良したと思われる悠太の自由研究が置かれている。
　椅子に腰掛けてハムスターの回し車を指で動かしながら、未羽は昨日のことを思い出していた。

　昨日、ハルカという少年に出会いタイムマシンに乗せられて、約百年後の世界に連れて行かれた。しかも未羽は人類の未来を変える化学者になるという。後で落ち着いて考えてみても現実の出来事とは思えなかった。
　だけど更衣室でテニスウエアから制服に着替える時、未羽はそれが夢では無かったことを実感した。人工皮膚『スキン』を着たまま二〇〇八年に帰ってきていたのだ。
　自宅に帰った未羽はスキンを脱いだり着たり、形状を変えたり、色々と遊んでみた。操作は思ったよりも簡単だった。ただ『考える』ことにより、それは色、形、硬度、温度などを変える。カッターナイフで左腕を突き刺そうとすると、スキンは瞬間的に鋼鉄のような質感になったりもした。

「また来るって言ってたけど、いつ来るのかな」
　濡れたテニスウエアをタオルで押さえながら未羽がつぶやく。スポーツバックの中にはボール状に戻したスキンが入れてある。これをハルカに返さなければいけない。将来自分が発明するものだとはとても思えなかったけれど。

「そういえばぴかっちはどこに行ったんだろう」
　色々なことが起こり過ぎて気付かなかったけれど、自由研究の発光バクテリアは理科室から姿を消していた。
　窓の外ではスコールのような豪雨が降っている。にわか雨だろうから止むまで理科室で時間を潰そう。未羽がそんなことをぼんやりと考えていると黒板の方から風が吹いてきた。

　教壇の左端から扇風機のような弱い風が流れてくる。何も無かったその空間に次第に銀色をした檻が浮かびあがる。
　ひゅううん。
　小さな回転音と同時にハルカの乗ったタイムマシンは再び未羽の前に現れた。

「ミウ！」
　立ち上がった未羽が口を開く前に、彼は未羽に駆け寄ってきた。顔色は悪く悲壮な表情をしている。
「助けて欲しいんだ。僕は大変なことをしたのかも知れない」
　彼は今にも泣きそうな声で未羽の身体を抱きしめる。
「ちょっと、どうしたの？」
「とりあえず二十二世紀に……」
　そう言いかけたハルカの動きが止まる。

「……誰だよ。てゆうか、それ何だよ」
　開けっ放しの理科室の入口には悠太が立っていた。

12、いいんだ

　未羽がハルカに抱きしめられたまま後ろを振り返ると、ドアの前に立って二人を睨みつけている悠太がいた。
「とりあえず未羽から離れろよ」
「ああ、ごめん。もしかしてミウの彼氏？」
　未羽の腰にまわしていた手を離しながらハルカが言うと
「ううん、全然違う」
　と未羽は大きく首を振った。

　窓の外ではまだ強い雨が降り続き、蒸すような空気が理科室を覆っている。
「いつから見ていたの？」
「それが何も無い空間から出てくるところから見てたよ」
　未羽の質問に悠太は憮然とした表情でタイムマシンを指差す。
「二十二世紀がどうとか言ってたよな、もしかして……」
　悠太が理科室の中に入り、ゆっくりと教壇に近づいていく。
「うん、タイムマシンだけど」
「あ、言ってもいいんだ」
　ハルカは相変わらず未来から来たことを隠すつもりも無いようだった。軽い態度に未羽が少しあきれた表情になる。

「で、今日はどうしたの？」
「そうだ、ミウに確認したいことがあったんだ」
　タイムマシンの前に座り込んでしげしげと眺めている悠太をほったらかして二人は話を進めた。
「ここの机に置いてあったシャーレって……」
「ああ、昨日から見かけないの」
「中身は何だったの？」
「私の自由研究の発光バクテリア」
　ハルカは「やっぱり」とつぶやきながら床に崩れ落ちるように座り込む。かなりのショックを受けているようだった。
　傍に座って彼の顔を覗き込む未羽に
「二十二世紀に一緒に来てもらえないかな。助けて欲しいんだ」
　とハルカは弱々しい声で言った。

「俺も行く！」
　一人でタイムマシンを触っていた悠太が急に立ち上がる。

「うん、いいよ」
「あ、いいんだ」
　ハルカの気軽な返事に、未羽も悠太も拍子抜けする。

「そうだ、これを返さないと」
　未羽が実験机の下に置いていたスポーツバックからスキンを取り出す。ハルカはボール状のそれを一旦受け取り
「これはミウが持っておいて」
　とスキンを手にしたまま未羽の右手首を握った。スキンは彼の手の中でぷるんと形状を変え、透明なリストバンドのようになって未羽の手首に収まる。

　教壇の上に置かれたタイムマシンに三人で乗り込む。ハルカが操縦席に座り、その後ろに未羽と悠太が並んで座る。悠太はかなり興味深そうにハルカの手元を覗き込んでいる。
　三人を乗せたタイムマシンは再び西暦二一一二年へと出発した。

13、部屋

　未羽と悠太は軽い眩暈を感じた。タイムマシンを包み込む銀色の帯が次第に回転速度を落とすと、目の前に現れたのは六畳ほどの部屋だった。
「ここはどこ？」
　部屋を見渡しながら未羽が尋ねる。白い壁紙は多少薄汚れていて部屋に窓は無い。換気扇のような排気口が部屋の上部に据え付けてあり、そこから空調が効いているようだった。スチールの机には二十四インチほどの液晶ディスプレイが置かれている。シングルベッドには灰色の幾何学模様のベッドカバーがかけられていた。
「どうやら僕の部屋みたいなんだ」
　ハルカが下唇を軽く噛みながら返事をする。

「すっげー！」
　それまでずっと黙っていた悠太が急に声を上げる。
「本当に移動した！　本物のタイムマシンだ！」
　悠太はかなり興奮してハルカの前に歩み寄る。
「なあ、これって素粒子タイムマシンだろ？　あの回転する光が重力場を発生させて、擬似的なブラックホールを作り出しているんだ」
「さあ、技術的なことは全然わからないけど」
「未羽、俺のタイムマシンと同じ原理だよ！」
「単三電池二本でブラックホールを作るつもりだったの？」
　未羽の返事に悠太は「わかってないなあ」と偉そうな表情を作る。さっきまでの憮然とした態度が嘘のように機嫌が良い。

「話を戻すけど、ハルカの部屋って」
　悠太にかまわず未羽が話を進める。悠太がタイムマシンを勝手に起動して触っているのもハルカは特に気にしていないようだった。
「うん、僕はこのマンションに家族と住んでいるらしい。昨日一晩かけて色々調べたんだけど、友達が半分くらいアドレス帳から消えている。サラも……」
　ハルカが悲しそうに目を伏せる。
「なあ、このタイムマシンって未来には行けないようになってるの？　西暦二一一二年以降はロックがかかっているみたいだ」
　ハルカと未羽が二人でベッドに並んで腰掛ける。悠太の発言は軽く無視される。
「二十二世紀が変わってしまったってこと？」
「見てもらった方が早いかも知れない」
　ハルカの言葉に未羽は小さくうなずく。

「スキンの予備を持っていないんだ。彼と半分で着てもらえないかな。使い方はわかるよね」
「うん」
　未羽が自分の手首に着けられたスキンを半分にする。タイムマシンの上にあぐらをかいていた悠太が、突然ゲル状の物体を首筋に押し付けられ「わあ！」と叫ぶ。
「どんな形にすればいいの？」
　未羽が振り返りながらハルカに尋ねる。
「うーん、じゃあとりあえずこんな感じで」
　ハルカが机の上の液晶モニタに手をかざすと、画面に『2112 Summerファッション』と書かれたページが表示される。

「うわあ、ちょっと何！」
　シャツの中に入ってくるスキンの感触に身をよじる悠太を「じっとしていて！」と未羽が押し倒す。

　制服を脱いだハルカはサイクルウエアのような身体にフィットした服を着ていた。光沢のある淡い水色で、ハイネックの半袖シャツとスパッツのようなハーフパンツを履いている。
　未羽も「こっち見ないでね」と悠太に言いながらテニスウエアを脱ぐ。彼は自分の襟を引っ張ってシャツの中を覗き込んでいる。

　未羽は薄いサーモンピンク、悠太はオリーブグリーンの、ハルカが着ている服に似たスキンに身を包んでいた。
「じゃあ、外に出てみようか」
　先頭に立ったハルカが金属製のドアノブにゆっくりと手を伸ばした。

14、未来

　部屋の外は玄関へ続く短い廊下になっていた。廊下の左側には他の部屋へのドアが見える。
　鉄製の重い玄関扉を開けると、コンクリートで作られた無機質な共用廊下とエレベーターが目に入った。フロアの壁には『88』と書かれている。
　ハルカに続いて未羽と悠太もエレベーターに乗り込む。一階のエントランスを出ると、目の前の道路を多くの車が走り抜けていった。

「ここは……」
　未羽が口を開きかけて咳き込む。
「なんか息苦しいな」
　悠太の言葉にハルカは振り返って
「そうか、スキンを半分にしてしまったから顔まで保護してないんだね」
　と言いながら、二人の服に目線を這わせた。
　未羽と悠太の袖がするすると縮んでノースリーブになり、代わりに顔と髪をコーティングする。

　悠太が顔をしかめて瞬きをする。未羽が深く息を吸い込む。スキンに鼻腔を保護されたことにより呼吸はかなり楽になっていた。
「ここはもしかして」
　未羽にはその地形に見覚えがあった。灰色にくすんだ空、道路の向こうには防波堤と黒く淀んだ海が見える。

「うわー、なんか未来って感じ」
　悠太が街並みを見上げながら言う。
　立ち並ぶ高層ビル、何層にも張り巡らされる高速道路。建物からは人々が忙しそうに出入りしている。
「あそこに見えるのは原子力発電所らしいんだ」
　ハルカがビルの隙間を指差す。スモッグのせいでぼんやりとしか見えないが、白い大きな建物があった。

　三人で防波堤の前まで歩いていく。
「あのあたりに僕の部屋があったはずなんだけど、海岸も全部埋め立て地になってる。あっちの海では原油を採掘している。ここでは海水発電は実用化されていないみたいなんだ」
　前回来た時と全く違ってしまった水平線を未羽はぼんやりと見ていた。

「ミウがスキンを発明するのも二十年ほど遅れているし、応用技術も未熟で人体を保護する目的

でしか使用されていないらしい」
「ぴかっちが無くなったから？」
　未羽の言葉にハルカは
「僕のせいだ」
　と防波堤に手をつきうなだれた。

「タイムマシンが僕の部屋に届いた時、制服と一通の手紙が同梱されていた」
　ハルカが海岸沿いのコンビナートを眺めながら語る。
「手紙には、ある時代に行ってあるものを処分してきて欲しいって、細かい時間と場所が指定してあって」
「じゃあ、ハルカがあのシャーレを……」
「元々、落札後の指示に従うという条件で買ったんだ。だけど、こんなことになるなんて」

　防波堤に腰かけ、目の前を走り抜けていく流線型の自動車を眺めていた悠太が口を開く。
「話がよく見えないけど、こいつが未羽の自由研究を捨てたせいで歴史が変わったんだな」
「そっか、じゃあもう一回二〇〇八年に戻ってハルカを止めればいいんだ」
　未羽の言葉に悠太は防波堤から飛び降り
「過去への干渉は危険だ。自分同士の接触は避けないと大変なことになるぞ」
　と難しそうな顔をして言った。
「どうして？」
「時空に歪みが出て宇宙がバクハツしたりするんだ」
「どういう原理で？」
「バック・トゥ・ザ・フューチャー見てないのかよ」
　未羽が「そんな古い映画」と呆れた顔をする。

「どうしたらいいんだろう」
　ハルカが困惑した表情で悠太の顔を見る。
「なるべく誰とも接触しないように歴史を元に戻さないと。行くか」
　悠太がやたらと嬉しそうに
「過去へ！」
　と大げさに空を指差すポーズを取った。

15、焼却炉

　小さく空気を切る音を立てて、三人を乗せたタイムマシンは二〇〇八年に戻ってきた。七月二十三日、午前十一時四十分。ハルカが未羽の自由研究を処分する約一時間前。
　空から強い日差しが照りつけてくる。校舎内は誰かと接触する可能性があるので裏庭に場所を設定した。
「あ、俺だ」
　悠太が眩しそうに校舎の角から三階を見上げる。理科室の窓辺にタオルを頭に巻いた悠太の姿が少しだけ見えた。

「でも、ハルカにぴかっちを捨てさせたのって誰なのかな」
「手紙に署名がしてあったよ。確か……」
　ハルカがカーデガンのポケットから白い紙を取り出す。開いた手紙を未羽と悠太が覗き込んだ途端、右下の『space world』と書かれた筆記体の署名から緑色の炎が立ち上がった。
「うわっ」
「ハルカ、服の袖が燃えてる！」
　悠太が慌ててハルカの右手から紙を取り上げ焼却炉の隙間にねじ込む。焼却炉の煙突から緑の煙が大きく噴出し、数秒経って白く細い煙へと変化した。
「そうか、繊維の服って燃えるんだ」
　ハルカが他人事のように自分の焦げた袖を見る。スキンを着ていたので火傷はしていないようだった。

　校舎の向こう側からサクサクと土を踏む足音が聞こえてくる。
「やばい、石田先生じゃない？」
　未羽と悠太が慌てて焼却炉の前から離れ
「タイムマシンを隠してくるから、石田先生を足止めしておいて！」
　とハルカに言い残し校舎の角を曲がって行った。

「そこで何をしているの？」
　途方に暮れて焼却炉を眺めていたハルカの傍に石田が歩み寄ってくる。焦げた袖をズボンのポケットに隠したまま、ハルカは振り返って彼女の顔を見る。それから少しだけ考えて
「錆びた金属を見ていました」
　と落ち着いた声で言った。

　悠太がタイムマシンを校舎の端に寄せ、未羽がどこからか探してきた白いテントの布をタイムマシンの上に被せていると、石田の小さな叫び声が聞こえてきた。
　二人が校舎の角から焼却炉の方を覗き込む。花壇に倒れこんだ石田をハルカが心配そうに見つ

めていた。
「ハルカ、ハルカ」
　未羽が小声でハルカを呼び寄せる。
「石田先生に何をしたの？」
「僕に好意を持ってくれていたみたいだから、軽いスキンシップを……」
　テントで覆われたタイムマシンの前にハルカもゆっくりと歩いてくる。
「見境無いなあ」
　悠太が苦い顔をすると
「年上の女性もなかなかいいよ」
　とハルカは悠太にだけ聞こえるくらいの小声で言った。

「ところで、あの人はあのままでいいの？」
　ハルカが心配そうに尋ねていると
「石田先生が倒れてる！」
　校舎の上の方から悠太の大きな声が聞こえた。
「いいみたい。校舎に入ろう」
　三人は音を立てないようにこっそりと校舎内に入り込んだ。

16、作戦

　三人が階段を駆け上がり三階で右に曲がると、丁度未羽と悠太が理科室から出くるところだった。過去の自分と鉢合わせになった未羽が、慌てて踵を返しハルカを階段まで押し戻す。
　理科室のドア付近から『七月二十三日の未羽と悠太』の話し声が聞こえる。
「何してんだ、行くぞ」
「今、廊下にテニス部の子がいたんだけと隠れちゃった。知らない男子と一緒だった」
　二人が反対側の階段を下りていく足音を確認して、ハルカと未羽と悠太は理科室へ入った。

　悠太が窓から外を覗くと、本城が花壇に倒れた石田を抱きかかえているのが見えた。傍には未羽と悠太も立っている。
「えーっと、どうしよう」
　未羽が理科室の壁掛け時計を見上げる。時計はすでに十二時を過ぎていた。十二時半には過去の未羽と悠太が保健室から戻ってくるはずだ。

「このシャーレを安全な所に隠そうか」
　ハルカが実験机の上に目を落とす。悠太の自由研究と並んで、シャーレに入った未羽の発光バクテリアが置かれている。
「ハルカに未羽の自由研究を捨てさせないと、なんかややこしいことにならない？　俺もタイムマシンに乗せて貰えないし」
　二人がシャーレの前で相談していると
「これこれ！」
　ごそごそと実験用の冷蔵庫を覗いていた未羽がコンビニの袋を取り出した。中には『新発売！海洋深層水こんにゃくゼリー』と書かれたカップゼリーが入っている。

　未羽がゼリーの表面をプラスチップスプーンで丁寧にすくう。悠太が実験棚から新しいシャーレを取り出す。ハルカはその透明なゼリーを受け取り、悠太の持つシャーレにそっと入れて蓋をする。
「それうまいのか？」
　発光バクテリアの入ったシャーレを実験机の引き出しに隠しながら悠太が怪訝な顔をする。
「うーん、塩スイーツって感じ」
　未羽が残ったゼリーを口に運びながら答える。ゼリー入りのシャーレを実験机の上に置いたハルカが興味深そうにカップゼリーを眺めていると、廊下から足音が聞こえてきた。
「うそっ！　もうこんな時間」
　時計は十二時三十分を指そうとしていた。三人が窓際の実験机の下に隠れると同時に、過去の未羽と悠太が理科室に戻ってくる。

「もう十二時半か、腹減ったなあ」
「あれー？　私のゼリーが無い」
　未羽と悠太の話し声が聞こえる。机の下ではハルカが未羽からプラスチックスプーンを受け取り、ゼリーを味見している。
「あっ、教室にお弁当置きっぱなしだ。ちょっと取ってくるから先に職員室に行ってて」
　未羽が部屋を出て行く足音に次いで、悠太も弁当箱を持って理科室から出て行ったようだった。

「このあと僕がこのシャーレの中身を処分するはずだから、そこまで見届けよう」
　ハルカはそのまま実験机の下に、未羽と悠太は理科室の外に身を隠すことにした。
　四階から未羽が駆け下りていく足音を未羽が確認する。一階の職員室へ向かったのは二一一二年でクラブハウスサンドイッチを食べて戻ってきた未羽だ。
　未羽と悠太が二階の踊り場に移動すると、四階からハルカが下りてきた。二人は階段に身を伏せて、まだ右袖の焦げていないハルカが理科室に入っていくのを待つ。
　足音を立てないように理科室に近付き、開け放たれたドアから中を覗くとハルカが手紙を読んでいた。彼は急に振り返り、廊下側の窓に近づいてくる。未羽と悠太は慌てて後ずさりし、そのまま揉み合う姿勢になって階段の上に突っ伏す。

　ぱさり。未羽と悠太の背後で何かの落ちる音がする。二人が振り返ると、本城が階段の途中で立ち尽くしていた。
　未羽は階段の上に四つん這いの姿勢になり、本城の立つ位置からはアンダースコートが丸見えになっている。悠太はその上にぴったりと覆い被さる形で、未羽の背中と二の腕を押さえつけている。
　その姿を見た本城は何事も無かったかのように落としたノートを拾い上げ、黙って階段を下りて行ってしまった。

「何してるの？」
　固まったままの二人の前にハルカが現れる。右袖が焦げている方の彼だ。
「もう一人のハルカは？」
　なんとなく気まずい雰囲気で二人がゆっくりと立ち上がる。
「向こうの階段から下りて行ったよ。少し校内を見学してから二十二世紀に帰るはず」

　三人で理科室の中に入る。実験机の上からシャーレは無くなっていた。水道の蛇口からは水滴がぽたぽたと落ちている。
「これで元の二一一二年に戻ったのかな」
　未羽が嬉しそうにハルカと話をしている中、悠太は無言で何かを考えていた。
「何かおかしくない？」
　黒板の上の壁掛け時計を見上げながら悠太が小さくつぶやく。

「違う！　これで未来が元に戻るはずが無い」
　彼は何かに気付いたように黒板の前に歩み寄った。

17、ふりだし

　悠太が黒板に白いチョークで長い横線を一本引く。
「石田先生が倒れていたのが十一時五十分前後、発光バクテリアとゼリーをすり替えたのが十二時半くらい」
　カツカツと音を立てながら、彼は黒板に時間と出来事を書き込んで行く。
「未羽が二十二世紀に行ったのはいつ？」
「えーっと、七月二十三日の十二時半よりは後だったけど」
「ハルカが校内を見学して二十二世紀に戻ったのは？」
「一時過ぎくらいかなあ」
　自分で黒板に書いた図を眺めながら「ありえない」と悠太が難しい顔をする。

「ここで未羽とハルカは本来の二一一二年に行く」
　悠太が黒板に書かれた図表の『12：30』のあたりに丸をつける。
「そして、発光バクテリアを処分したハルカがまた2112年に戻る。そしたら歴史が変わっていた」
『12：30』と『13：00』の間から一本分岐した線を引き、その端に『bad future』と書きなぐる。
「未羽、昨日のことを思い出してみろよ。昨日と言っても七月二十三日のことだけど」
「んー？」
　未羽が黒板を眺めて首を傾げる。
「昨日、石田先生は確かに倒れていたし、未羽のゼリーも消えていたし、本城先生はなんか勘違いしていた」
「ああっ、そうか！」
「つまり、全部決められていたことなんだよ。昨日からシャーレの中身はゼリーだったんだ」

「悠太って成績はイマイチなのに、こういう時には頭が働くのね」
「成績も言うほど悪くないぞ。未羽が良すぎるだけだ」
　まだ理解出来ずにぼんやりとするハルカに未羽が説明する。
「私たちが昨日体験した七月二十三日は、すでにすり替え作戦が成功した七月二十三日だったの」
　未羽が黒板に歩み寄る。
「だから、私が行った未来は正しい二一一二年だった」
　彼女は赤いチョークで『12：30』と『13：00』の間を横長い丸で囲む。
「だけど、その後ハルカが戻った二十二世紀は変わってしまっていた。つまり、十二時半から一時の間に何か歴史を変える出来事が起きているはずなのよ」
　三人が壁掛け時計を見上げる。時計の針は午後一時を過ぎていた。

「そういえば」
ハルカが口を開く。
「さっき机の下に隠れていたとき小さな物音がしたんだ。もう僕が来たのかと思ってそっと顔を出したら誰もいなかった。そのあとすぐに僕の足音が聞こえたから隠れたけれど」
　未羽が実験机の引き出しに隠してあったシャーレを取り出す。ガラスの蓋を開け、ちょっと匂いを嗅いでから指先で中身をつまみあげて一口食べる。
「ゼリーだ」
「ふりだしに戻る……か」
　悠太が深くため息をついた。

18、三つ

　昼を過ぎてますます室温の上がる理科室で三人は途方に暮れていた。
「バクテリアをもう一度培養しなおすわけにはいかないの？」
　カーデガンの焦げた袖から出てくる毛糸を気にしながら、ハルカが未羽に尋ねる。
「ぴかっちはお父さんが釣ってきたイカから培養したの。多分スルメイカだと思うんだけど、こんなに大きくて不思議な色をしているのは初めて釣ったって言ってた。だから他のイカで同じ結果が出るかどうか」
「多分、無理だろうな」
　悠太がため息をつく。
「そっか、じゃあ同じイカを取りに行けばいいんだ」
　未羽の頭にひとつの考えが浮かんだ。

　三人で裏庭に出てタイムマシンに被せてあった白いテント生地を剥ぐ。雲ひとつ無い空から日差しが照りつけてくる。
「七月十九日の深夜に行って欲しいの。場所は……とりあえず私の部屋で」
　ハルカがタイムマシンを起動し『2008．7．19　23：30：00』にセットする。場所の座標を入力してボタンを押すと、三人を乗せたタイムマシンはいつものように銀色の檻を回転させながら時空を移動した。

　急に暗い部屋に到着してほとんど見えなかったが、そこは未羽の部屋らしかった。八畳ほどの部屋に学習机と本棚が置かれている。ベッドの上には『七月十九日の未羽』が眠っている。
「台所へ行こう」
　未羽が小声で二人を促す。
「ううん……」
　ベッドから小さな声がする。未羽が振り返るとベッドの上の未羽が肌布団を脱ぎ捨てていた。キャミソールとショートパンツの寝姿があらわになっている。
　彼女は慌てて肌布団を掛けなおしハルカと悠太の顔を見る。二人とも目を逸らし、見ていなかったような素振りをする。

　台所の電気は消えていた。未羽はそのまま暗い部屋を歩いて行きゴミ箱の前で立ち止まる。分別ゴミ箱の一つを開け、中をごそごそと探って小さなビニール袋を取り出す。
「戻ろう」
　真っ暗な台所で手持ち無沙汰にしていた二人に声をかけ、未羽はハルカにビニール袋を手渡した。

三人は未羽の部屋から理科室に戻ってきた。七月二十四日の正午前。外ではまだスコールのような雨が降り続いていた。
未羽がゴミ箱から拾ってきた袋を開けると、新聞紙に包まれたイカのアラが入っていた。微かに生臭く感じるが、幸いまだ腐敗し始めていないようだ。

未羽がアルコールランプに乗せられたビーカーでイカのヒレを煮るのを、ハルカは邪魔にならない程度に手伝っている。
「本城先生から非常食を分けてもらってきた」
職員室に行っていた悠太がカップ焼きそばを一つ持って理科室に戻ってきた。
「お昼にしよう。お腹すいちゃった」
未羽がイカの煮汁を寒天で固めている間、悠太はアルコールランプと三角フラスコで焼きそば用のお湯を沸かす。

「あっ、ソースは後から入れるんだよ！」
ハルカと悠太がカップ焼きそばの作り方で揉めている。未羽はスポーツバックから自分の弁当箱を取り出し嬉しそうに包みを解いている。
未羽と悠太は持ってきていた弁当、ハルカはカップ焼きそばの昼食をとる。
「不思議な味がする」
焼きそばをすするハルカに悠太が「うまいだろ」と声をかける。未羽が焼きそばの上に自分の卵焼きをひとつ乗せてあげた。
「あれは常温でいいの？」
悠太が実験机の上に置かれたシャーレを箸で指し示す。
「うん、涼しいところで培養したものは死滅しちゃった。三十度前後が好きみたい」

「そろそろいいかな」
最後の楽しみに残しておいたミートボールを口に入れて、未羽が席を立つ。実験机の上には寒天培地の入ったシャーレが四個置かれている。
「まだバクテリアのコロニーは見えないけど」
彼女はテニスウエアの下に着たままだったスキンを腕輪の形に戻す。それを三つに分けて皿のように広げ、シャーレの寒天を三等分してスキンで包んだ。
寒天を包んだ小さなボール状のスキンをもう一度腕輪の形にする。透明なホースで作ったようなブレスレットが三つ未羽の手のひらに乗せられる。
「これをひとつずつ持っておいて」
未羽はその細い腕輪をハルカと悠太に手渡し、自分の左手首にもはめる。
「残ったシャーレは理科室と、私の部屋と、本城先生にも預かってもらうつもり。これだけ分散させておけば誰かにすり替えられても大丈夫じゃないかな」

ハルカと悠太は黙ってうなずきながらブレスレットに手を入れる。三人の手首にはめられた腕

輪は光を反射して微かに輝いていた。

19、夕陽

　三人はタイムマシンに乗って西暦2112年へと向かった。この作戦が成功していれば、行く先はハルカが育った本来の二十二世紀に戻っているはずだ。
　タイムマシンを包む円柱形の檻が回転速度を落としていくと、眼前は空だった。青から山吹色に変わるグラデーションの空に、橙色に照らされた薄い雲がいくつか浮かんでいる。

　未羽と悠太がマシンの上でゆっくりと立ち上がる。
「いけない、僕の部屋の座標をマンションの八十八階にしたままだった」
　ハルカがモニタを確認しながらつぶやく。三人を乗せたタイムマシンは地上数百メートルの位置に静かに浮かんでいた。
「ここが本来の未来……」
　真っ赤な太陽が射しかかろうとしている水平線を眺めながら悠太が息を飲む。未羽も言葉を忘れて辺りを見渡していた。

　黄金色に照らされゆったりとうねる海面には、いくつもの細長い桟橋が伸び小さな家々に繋がっている。
　湾になった海岸線には砂浜と岩場しか見えない。視界に収まらないほど長い水平線は緩やかにカーブして地球の丸さを感じさせた。
　後ろには夕焼けに染まった森と幾つかの住宅が見える。遠くに街が見えるが高層ビルのようなものは無く、中規模のショッピングセンターや自然公園が集まっているようだった。
　夕陽に照らされたその風景は、未来なのに何故か懐かしさを感じさせた。

「とりあえず降りよう」
　ハルカがタイムマシンをゆっくりと降下させる。真っすぐ下に行くと砂浜から数十メートルほど森に入った位置だった。木々の間からハルカの部屋と思われる木の家が見える。
　タイムマシンをその場に置いたまま三人は砂浜に出る。海岸にも海にも人はほとんどいない。

「サラ！」
　ハルカが急に叫んで駆け出していく。彼の走っていった方を見ると、水着を着た少女が一人で浅瀬を歩いていた。
　夕陽を背にしたサラが彼に気付いて手を上げようとするのと同時に、ハルカは制服とスニーカーのまま海に入っていく。
「サラ、サラ！」
　膝下まで海に浸かって、彼はサラのことを強く抱きしめた。

「ハルカ、ちょっとどうしたの？」

「サラ……、無事だった？　マサカズは、ナオヤとリエコは、友達はみんな元気？」
　抱きしめられた腕を解き、サラは笑いながらハルカの顔を見る。
「何言ってるの、昨日会ったばかりじゃない。みんな元気よ」
　そう言いながらサラは、波打ち際に立つ未羽と悠太に気付いて
「三人ともその服……」
　と不思議そうに笑った。

20、総意

　夕陽は水平線の端の方に沈んでしまったけれど海岸はまだ明るかった。空と雲が紫色の複雑なグラデーションを作っている。
「これで全部うまくいったのかな」
　未羽が砂浜を歩きながらつぶやく。サラも家に帰ってしまい、海岸にはハルカと悠太と未羽の三人しかいなかった。
「全て解決したわけじゃないよな。未来を変えようとしている『誰か』がいるんだし」
　悠太が自分の左手首にはめられたブレスレットを眺める。三人の腕輪の中に入っている発光バクテリアはまだ誰かに狙われているはずだった。
「とりあえずタイムマシンを僕の部屋に移動しよう。それからミウたちを二十一世紀に送って……」
　そう言いかけてハルカが振り返る。背後に人の気配を感じたのだ。
「石田先生！？」
　未羽が声を上げる。三人の後ろには開襟シャツにタイトスカートを着た石田が立っていた。

「とても興味深い実験になりました」
　証明写真のような固定された笑顔で石田が三人に話しかける。
「なんで石田先生がここに？」
　悠太の言葉に彼女は
「私たちは石田永子ではありません。あなたたちに分かりやすいように映像を借りています」
　と真っすぐに立ち尽くしたまま言った。
「私たちは『総意』です。外見は何でもいい」
　そう言うと石田の姿をした何かはモザイク状に掻き消え、本城の外見に変わり、ハルカ、未羽、悠太の姿になり、また石田に戻った。それは精巧な立体映像か何かであるようだった。
「ソウイ？」
　悠太が身構える。
「私たちは『総意』であり『観察者』です。人類の膨大な未来を詳細に観察しています」
「全く意味が分からない」
　ハルカが眉間に皺を寄せる。

　石田の姿をした『総意』は、原稿でも読んでいるような口調で話を続ける。
「私たちは私たちの遺伝子を乗せた船であるあなたたち未来の人類を全て観察し研究しています。私たち人類は残念ながらこの時代から数十万年後に終末を迎えます」
　真剣な表情で話を理解しようとしていた未羽が
「あなたは二十一世紀より過去から来たってこと？　ハルカにタイムマシンを売ったのもあなた？」

　と『総意』に尋ねる。
「あなたたちが『超古代』と呼んでいる時代からあなたたちを観察していると理解して下さい。私たちの目的は私たちの遺伝子を永久に存続させること」

　未羽が『総意』と睨み合っている傍でハルカは
「話についていけてる？」
　と悠太に耳打ちする。
「なんとか」
　悠太の返事にハルカは困ったような表情をする。

「ハルカにぴかっちを捨てさせたのもあなたなのね」
「私たちの目的は私たちの遺伝子を永久に存続させること」
『総意』が同じ言葉を繰り返す。
「私たちは永い時間をかけて人類史を観察しました。人類はある時代から爆発的に増加し発展を続けます。そして円熟期を迎え緩やかに衰退し数十万年後には最後の一人の人間も死亡してしまう」
　ハルカと悠太は『総意』を真っすぐに見据える未羽を見ていた。その横顔はものすごい速度で何かを考えているようだった。かなわないな、と悠太は場違いにも感じていた。

「人類が衰退し始める原因が、ぴかっちとスキンなのね」
「人類は幸福な時代を迎えるべきでは無いと私たちは考えました。環境悪化や資源枯渇の心配が無い人類は地球外移住計画を中断してしまいました」
「でも、どうしてハルカに」
「私たちは『観察者』であり干渉することは出来ません。例えば」

　『総意』の言葉がそこでぴたりと止まる。石田の姿をしたそれはゆっくりと不自然に首を動かし、未羽の左側に立っていた悠太に視線を合わせる。
「え？」
　悠太が制服の下に着ていたスキンがじわじわと動き出す。それは煮魚の皮でも剥くように身体の中心から外側へと移動し、彼の腕と首の辺りで固まりになる。

　ひゅんっ。

　空間を切り裂く音と共に石田の両眼から蛍光緑の光線が出る。二本の光は悠太の胸の辺りでひとつに交わり、左胸のポケットを撃ち貫いて彼の背後の砂浜を焼いた。
「悠太！」
　悠太が息を詰まらせてその場に倒れこむ。白いシャツが見る見るうちに鮮血で染まっていく。
「悠太！　悠太っ！！」

未羽は彼の傍にひざまずき、声にならない声でうめく悠太の上体を抱きかかえた。

21、剣

　胸を撃ち抜かれた悠太はぐったりとして上半身を未羽に預けていた。ハルカは何が起こったのか理解できず、呆然とその場に立ち尽くしている。
　悠太が「ごぼっ」と喉に何かを詰まらせたような咳をする。
「……あれ？」
　悠太が目を開ける。彼がゆっくりと身体を起こすと、さっきまでシャツを真っ赤に染めていた血液が綺麗に消えていた。
「悠太、大丈夫なの？」
　未羽が血の気の引いた顔で悠太を覗き込む。
「なんともないみたい」
　彼の左胸のポケットと背中には、煙草の焼け焦げに似た穴が確かに開いていた。しかし、その内側は全くの無傷だ。

「このように」
『総意』が口を開く。
「私たちは干渉することが出来ません。私たちは時空を移動する術を手に入れました。しかし観察することは出来ても未来を変えることは出来なかった」
　未羽が砂浜にひざまずいたまま『総意』を睨みつける。石田の外見を借りたそれは棒読みで話を続ける。
「歴史には自己修復機能があります。私たちは未来を変えようと何度も試みましたが全て巻き戻されてしまいました。小さな出来事は動かせても歴史や人の生死に関わる事象には手が出せないようになっている」
「そうやって何人もの人を殺そうとしてきたのね」
　未羽がゆっくりと立ち上がる。彼女は本気で怒っていた。

「人類の辿る未来は一本の道であり誰も変えることができません。しかし私たちは膨大な観察と実験の中で『特異点』を見つけました」
　石田の顔がゆっくりとロボットのように動きハルカの顔に目線を合わせる。
「それは微小なウイルスに似ていました。私たちは慎重に小さな実験から始めました」
　未羽と悠太もハルカの方を見る。彼はただ黙って『総意』を見つめていた。
「『特異点』を十八世紀に連れて行くと確かに歴史は変わりました。ある絵師の美少年画が一点増えたという些細な変化でしたが。その浮世絵は二十二世紀の今もボストン美術館に所蔵されています。歴史という大木に小さな脇芽が発生したのです」
「ハルカが『特異点』なのね」
　ハルカが驚いた顔をして未羽を見る。

「次に大きな実験を行いました。それはあなたたちの手によって修復されてしまいましたが人類史は新しい大きな枝葉を伸ばそうとしていました。とても興味深い」
『総意』が少しだけ顔を動かし未羽を見る。
「私たちの目的は私たちの遺伝子を永久に存続させること」
「あっ」
　ハルカが小さく声を上げる。
「人類を終末から救うことなのです」
　未羽と悠太が後ずさりをする。ハルカの袖や首筋からスキンがうねうねと触手を伸ばしている。
「意思が……、意思が強すぎて拒否できない」
　ハルカがスキンに抗うように自分の両腕を押さえる。彼の背中と腕から伸びたいくつもの触手はフェンシングの剣のような形に変わる。

　ハルカの左袖から透明な剣が伸びて未羽を狙う。
「ミウ！　逃げて！」
　ハルカが両腕で自分を押さえつけたために狙いは外れたものの、硬質化したスキンは未羽の太腿をかすって傷つけた。
「ハルカに私を殺させるつもり！？」
　未羽が『総意』に向かって叫ぶ。
　がきん、と硬い音がする。悠太が左腕に小さな盾のようなものを作り、ハルカの剣を跳ね返した。
「未羽、逃げろ」
　悠太が未羽の前に立つ。
「悠太！　ハルカに殺されたらさっきみたいに巻き戻らないんだよ！」
　ハルカは苦しそうな表情で上体を屈め、なんとかスキンを押さえつけようとしている。
「未羽が死ぬよりはましだろ。てゆうか、俺かっこ良くない？」
　悠太がスキンを固めた盾を顔の前にかざす。その笑顔は無理に作ったものでは無く、本当に状況を楽しんでいるようだった。

「いいから逃げろって！！」
　悠太の叫び声と同時に未羽は森に向かって駆け出した。剣が長く伸びて木々の間を縫うように未羽の後を追う。悠太の体当たりでよろけたハルカのスキンは未羽を外してしなり、タイムマシンに当たる。
　考えるより先に、未羽はマシンのひび割れたモニタを叩いて操縦を開始した。未羽を包んで回転する銀色の帯の向こうにハルカと悠太が見える。
　剣は狙いを悠太に変えたようだった。ハルカの首筋から伸びるスキンを悠太が小さな盾で跳ね返す。次の瞬間、ハルカの右腕の剣がしなり悠太の背中に回りこんだ。

タイムマシンに乗った未羽が見たのはそこまでだった。

22、ワイルドストロベリー

　随分長い時間タイムマシンに乗っているような気がする、と未羽は感じていた。実際には数十秒程度の移動だったのだが、上昇してゆくような感覚の連続に身体が耐えられなくなってきていた。
　ようやくマシンの回転速度が落ちてくる。視界に真っ白な空間が広がる。
「寒い……」
　両手で自分を抱きかかえるように身をすくめる。タイムマシンのひび割れたモニタには『802701．7．24　19：00：30』と書かれている。
「はちじゅうまんにせん……」
　未羽が眉間に皺を寄せてモニタを眺めていると
『あら、いらっしゃい』
　と声が聞こえた。

　未羽が顔を上げる。さっきまで何も存在していなかった白一色の空間に女性が一人座っている。
　彼女は辺りに溶け込むような白い椅子に腰掛け、未羽に優しく微笑みかけている。日に当たったことの無いような白い肌に長い白髪。朱色のゆったりとしたチュニックのような服を着ている。
「こんにちは……」
　未羽が寒さに震えながら立ち上がる。
『今日はスキンを着ていらっしゃらないのね。それでは寒いはずだわ』
　女性の口は動いていない。言葉ではなく未羽の脳に直接話しかけているようだった。彼女が自分の服の袖を少し千切る。米粒くらいの赤い塊は白い手のひらを離れ浮遊し、未羽の目の前で大きく広がる。朱色の毛布のようになったそれを未羽は肩に羽織る。

『先日持ってきて下さった紅茶がまだあるのよ。お掛けになって』
「先日？」
　未羽の後ろには一人がけの白いソファがあった。目が慣れてくると、そこは白くて広い部屋であることが分かった。天井も壁にも継ぎ目は無く、卵の殻を内側から見ているようだと未羽は思う。
　壁の一部が柔らかく広がるように開き、隣の部屋からティーセットを乗せたトレイが二つゆっくりと飛んでくる。
　白いトレイに乗せられたティーポットとカップには野いちごの絵柄が描かれている。未羽が気に入って使っているウエッジウッドのカップと同じシリーズのものだった。
　ソファに腰掛けティーポットから紅茶を注ぐ。湯気を立てる紅茶を一口飲むと、アールグレイの味だった。

『淹れ方は間違っていないかしら。私には珍しい飲み物だから』
「とてもおいしいです。ところで私はここに来たことがあるんですか？」
　傍に浮かぶ白いトレイにカップを置く未羽を、女性は不思議そうに見つめる。

『あら』
　女性が恥ずかしそうに微笑む。
『いつもより随分お若いわ。もしかしてここに初めて来られたのね』
　彼女は紅茶を一口飲む。国籍も年齢も分からない美しい顔立ちをしている。
『私が一人になってからというもの、あなたは何度も遊びに来てくれたわ。その時空を移動する機械に乗って。お友達といらしたり、旦那様といらしたり』
「だんなさま！？」
　未羽が飲みかけていた紅茶を吹きそうになる。
『旦那様のお名前を聞きたい？』
「き、聞きたくないです！　絶対に聞きたくないです」
　慌てて耳を塞ぐ未羽を見て、女性は声も立てずに笑う。

『あなたが何か大きな受賞をされたとかで、パーティーをした時も楽しかったわ。シャンパンを開けて、みんなでケーキを食べて。そうやっていつも訪ねて下さるから寂しさを感じる暇なんて無いのね。この老体が朽ちるのを待つだけの最後の一人だというのに』
「最後の一人？」
　女性が自分の右横に目線を向けると、白い壁にゆっくりと穴が広がっていく。映画のスクリーン程の大きさに広がったそれは窓であるようだった。
　外はどこまでも白い氷の世界だった。地平線より上は紫がかった灰色の空で、三日月と幾つかの星が輝き始めている。
　未羽が毛布に包まったまま窓に歩み寄る。八十万年後の終末の地球。地面と空しか無い一本の線の世界。

「あなたが人類の最後の一人なんですか」
『そうらしいわ』
　未羽が床に目を落とす。人間は本当に滅びてしまうのだ、自分の発明のせいで。『総意』の言うことは正論かも知れない。この美しい女性は人類最後の子供で、ただ静かに死を待っている。助けられるのものなら何とかしたい。その感情は母性本能に近いものだった。
『ねえ』
　未羽の心を読んだかのように女性は語りだす。
『私は幸せだったわ。人類がどうとか難しいことは分からないけれど、私自身は本当に幸せだった。父も母も死んで一人になってしまった今も幸せよ。そして死も怖くないの』
　椅子に座ったまま女性は微笑む。それは無垢な少女と全てを知り尽くした老婆を併せ持ったような不思議な笑顔だった。

『私は幸せだったわ』

　繰り返される女性の言葉に未羽は決意する。
「友達を助けに行かないといけないんです」
　窓の外はすっかり暗くなり満天の星と天の川が輝いている。朱色の毛布をマントのように羽織った未羽の顔にもう迷いは無かった。

23、勇者

　ハルカの剣でひび割れてしまったタイムマシンは、タッチパネルがうまく反応しなくなっていた。移動時間をセットすることが出来ないのだ。
　未羽が困っていると
『スキンで修理できるのではないかしら』
　と女性が椅子に座ったまま言った。
　羽織っている朱色の毛布を少し千切ってモニタに貼り付ける。スキンは透明になり画面に染み込むようにひびを埋めていった。この時代のスキンはかなり進化しているようで、二十二世紀のものとは質感も随分異なっている。
「ありがとうございました」
　未羽が毛布を脱ごうとすると
『役に立つこともあるでしょうから』
　女性はそう言ってスキンを未羽にそのまま持たせた。

　もう一度お礼を言ったあと未羽は
「お名前を教えていただけますか」
　と女性に尋ねた。彼女は優しく微笑んで言う。
『ミウ、不思議な偶然だけれどあなたと同じ名前なの』

　必ずまた来ることを約束して未羽はタイムマシンの操縦を開始した。移動のメモリーを確認して出発した少し前に時間をセットする。光が未羽の周りを包み回転を始める。二十二世紀に行ってハルカと悠太を助けなければならない。
　八十万年後の世界に来た時と同じように、今度は深く深く下降して行くような感覚が数十秒間続いた。身体を押し付ける圧力と吐き気に未羽は目を閉じる。

「ミウ！　逃げて！」
　遠くから聞こえるハルカの声に未羽は顔を上げる。彼女の乗ったタイムマシンは桟橋の上に停まっていた。
　砂浜ではハルカが鋭い触手を伸ばしている。悠太が小さい透明な盾で応戦する。さっき未羽が体験した場面を、戻ってきた未羽は別の角度から見ていた。
　マシンから降りて桟橋を走る。「間に合わない」そう思うと同時に未羽の羽織っていたスキンはひとりでに形を変えた。

「いいから逃げろって！！」
　悠太の叫び声と同時に森へ駆けていく未羽を未羽は見た。狙いを外したハルカの剣が悠太の方

を向く。
「悠太ーっ！」
　桟橋から走って来る未羽の手には朱色のテニスラケットとボールが握られていた。考えるよりも先に身体が動く。左手でトスしたボール状のスキンをラケットで思い切り打ち付ける。
　朱色のボールは悠太の背後でワンバウンドし、大きく広がって毛布のようになる。悠太の背後を狙ったハルカの剣が、硬い音を立てて朱色の毛布に跳ね返される。
「未羽！？」
「何でもいいから武器と防具をイメージして！」
　波打ち際から未羽が悠太に向かって叫ぶ。
「武器と防具！？　えっと……」
　跳ね返されたハルカの剣は大きく背後にしなり再び悠太を狙おうとする。毛布状のスキンが悠太の身体に巻きついていく。
　がきん。
　悠太の右手に握られた武器が、ハルカのスキンの一本を切り落とした。

「うわぁ……」
　悠太が自分の手にする装備を眺める。銀色に輝く剣と盾、肩から腰までを覆う派手な装飾の鎧、頭には黄金の兜まで被っている。
「悠太……」
　未羽が状況を忘れて思わず苦笑する。ハルカと向き合う悠太は、どう見ても『勇者』だった。

24、天空の

　悠太は武器と防具を手に入れた。ハルカが驚いた顔で悠太を見ている。そんなハルカの意思とは関係無く、彼の背中から伸びるスキンが細く鋭い剣になり悠太を狙う。
　悠太が自分の剣でハルカのスキンをなぎ払う。金属質の重厚な外見に反して剣も盾も実際には随分と軽かった。ハルカの触手が三本、砂浜に落ちる。
「すっげー」
　黄金色の兜を被った悠太が笑みを浮かべている。装備を手にした本人が一番驚いているようだった。

　ハルカが急に砂浜にひざまずいて切り落とされたスキンのひとつを拾い上げる。悠太が身構えると、ハルカはその細い剣先を自分の喉元に突きつけた。
「これ以上僕の友達を傷つけるようなら、僕は死ぬ！」
　少し離れたところから二人の戦いを眺めていた『総意』に向かってハルカが叫ぶ。
「僕がいなくなると困るんだろう」
　スキンが薄くなった分、ハルカは多少自分の意思で身体を動かせるようになっていた。腕を引っ張るスキンの力に逆らって、彼は剣を自分の首に近づける。喉仏の辺りから血が一筋流れる。

　『総意』が急に一時停止ボタンでも押したかのように静止してしまう。
「どうなったの？」
　ラケットを持った未羽が恐る恐る二人に近づいてくる。
「さあ」
　悠太が『総意』に歩み寄り、剣で胸の辺りを突いてみる。それはやはり精巧な映像であるようで、剣は全く手ごたえの無いまま石田の胸から背中へ突き抜けた。

「私たちの目的は私たちの遺伝子を永久に存続させること」
「わあっ！」
　急に喋り出した『総意』に悠太は慌てて身構える。
「あなたたちを傷つけることではありません」
　スキンに自由を奪われていたハルカが拘束から開放されたようでふらりと体勢を崩す。
「……約束して」
　ハルカが砂浜にひざまずいたまま『総意』を見上げる。
「二度と僕や、僕の友達に手を出さないって」
「それは約束できません。私たちは私たちの正義のために行動しています」
「僕の友達を傷つけたら、僕は思いつくあらゆる方法で人類を滅亡に導いてやる。僕には歴史を変える力があるんだろ」
　今までに見たことも無いような険しい表情でハルカが拳を握り締める。

「僕にとっては人類の未来よりも友達の方が大切なんだ」
　彼の言葉は本気だった。

　『総意』はしばらく静止したあと「分かりました」と返事をした。
「約束しましょう。しかし私たちは観察と実験を続けます」
　石田の顔がロボットのようにゆっくりと動き、ハルカと未羽と悠太の顔を一人ずつ見つめる。
「人類を終末から救う方法を探し続けます」
　そう言い残して『総意』はモザイク状に掻き消えた。

「ああ……」
　未羽と悠太が脱力してその場に座り込む。
「大丈夫だった？　ごめん……」
　ハルカが悠太に声をかける。その声と表情はもういつものハルカだった。
「あはははは、すげー楽しかった」
　悠太が鎧を着たまま砂浜に倒れる。
「それ見たことがある。なんだっけ」
　朱色のテニスラケットを膝に乗せた未羽が、大の字に寝転んだ悠太を眺める。
「天空の剣。ドラクエやったこと無い？」
　悠太が張りぼてのように軽いその剣を天にかざす。すっかり暗くなってしまった空には星が輝き始めていた。

25、TO BE

　西暦二〇〇八年七月二十四日。正午を過ぎた理科室に三人を乗せたタイムマシンは戻ってきた。微風を送りながら円柱状の檻が回転を緩める。ハルカのカーデガンの袖は焦げていてズボンとスニーカーはまだ湿っている。未羽の足元は砂だらけだし、悠太のシャツには穴が開いている。

「まだ今日なのかあ」
　悠太がタイムマシンから降りる。窓の外の雨は小降りになり青空が見え始めていた。
「僕たちまた会えるのかな」
　未羽に続いてハルカも立ち上がる。
「うん、会えると思うよ」
　未来を見てきた未羽は知っていた。これから先もこのタイムマシンに何度も乗ることになるのだろう。
「ミウ」
　ハルカが未羽の身体に腕を回す。
「ミウ、大好き」
　突然抱きしめられて抵抗しかけたけれど、ハルカのあまりにも寂しそうな声に未羽は仕方なく力を緩める。
「うん……」
　悠太が腕を組み、苦々しい顔で二人から目をそらす。

「それから、本当に色々とありがとう。えっと……」
　ハルカが悠太に握手を求めようと手を伸ばしながら少し考える。
「……名前、なんだっけ」
「今更かよ！」
　鋭くツッコミを入れたあと、悠太は苦笑しながらハルカの手をとった。
「二島悠太」
「そうそうユウタだ。本当にありがとうユウタ」

　タイムマシンの上に座り移動時間をセットしながらハルカがふと何かを思い出したようにつぶやく。
「ユウタ・フタジマ……？　なんか聞いたことがあるような」
「え？」
　ハルカがモニタの『OK』と書かれたボタンを押す。
「まあいいや。じゃあまたね」
　銀色の帯がタイムマシンとハルカを包んで回転する。彼の屈託の無い笑顔は光の中に溶けていき、マシンも小さな風を立てて教壇の上から消えた。

＊＊＊

夏休みが終わり、提出された未羽の自由研究は大きな反響を呼んだ。
最初に本城に問い合わせてきたのは自由研究コンクールを主催する担当者だった。それから立て続けに企業や研究機関の人間が未羽に会いに来た。
いくつもの企業が未羽の研究を高額で買い取りたいと申し出たが、未羽はそれを求める全ての人々に無償で発光バクテリアを譲った。ただし、研究の成果を公開し共有することを条件として。そうして彼女の発見した『ぴかっち』は瞬く間に世界中の研究機関へと広がって行った。

「おはよう」
制服を着た未羽が悠太に声をかける。悠太は始業前の理科室で椅子に座ってぼんやりしていた。
「おはよ」
「悠太の『タイムマシンの研究』市のコンクールで銀賞だってね。おめでとう」
「それ、何かの嫌味？」
悠太が憮然とした顔で答える。
「私の自由研究は何も受賞しなかったよ」
「毎日のようにニュースでやってるよ。天才少女は海外の大学に留学するとか言ってるぞ」
「しないよー。断ったもん」
悠太が実験机の上に頭を乗せてつまならそうに言う。
「退屈だ、ハルカまた来ないかな」

教壇の左端から扇風機のような弱い風が流れてくる。何も無かったその空間に次第に銀色をした檻が浮かびあがる。
「ハルカ！？」
未羽と悠太が立ち上がる。小さな回転音と共にタイムマシンは二人の前に現れた。
「ミウ、ユウタ！　助けて欲しいんだ」
ハルカが深刻な表情で二人の傍に歩み寄る。
「二十二世紀で何かあったの？」
「違う、君たちの子供が助けを必要としているんだ」
「はあ！？」
呆然としたまま未羽と悠太はタイムマシンに乗せられる。ハルカがモニタの時間をセットして操縦を開始する。
三人を乗せたタイムマシンは光の帯に包まれ未来へと消えていった。

- TO BE CONTINUED -

未来少女ミウ

http://p.booklog.jp/book/25159

著者：山田佳江
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/yo4e/profile

発行所：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/25159

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/25159